

【 論 文 】

環境ボランティアによる資源リサイクル活動とエンパワーメント†

— 参加者の有能感・連帯感・有効感の獲得と今後の活動意図 —

前田 洋枝*・広瀬 幸雄*・安藤 香織**
杉浦 淳吉***・依藤 佳世*

【要旨】本研究の目的は環境ボランティア活動へのコミットメントがエンパワーメントと今後のボランティア活動意図に及ぼす影響を検討することである。行政による資源回収制度が開始された地域において、資源リサイクルボランティア378名に対して質問紙調査を行った。資源リサイクルボランティア活動へのコミットメントがボランティアのエンパワーメントを通して今後のボランティア活動意図に与える影響を検討した。コミットメントは個人的エンパワーメントと集合的エンパワーメントの両方に影響を及ぼしていた。コミットメントが直接活動意図に影響するのではなく、エンパワーメントを通して活動意図に影響することが明らかとなった。今後のボランティア活動意図について個人的エンパワーメント（連帯感）と、集合的エンパワーメント（地域に対する有効感）の両方が影響していた。

キーワード：環境ボランティア，コミットメント，個人的エンパワーメント，集合的エンパワーメント

1. 問 題

1.1 普及エージェントとしての環境ボランティアの役割とその状況

環境ボランティアを、ごみ減量や資源リサイクルの普及エージェントとして捉え、その機能的役割を明らかにする環境社会心理学的研究¹⁻³⁾が行われてきている。ボランティアが資源リサイクルを普及するために地域の住民に働きかけたアクションリサーチによって、ボランティアメンバーが地域で取り結んでいるネットワークを通じての情報提供や参加の勧誘など対人的な働きかけが、住民がリサイクルに自発的に参加する際に大きな影響を及ぼすことが明らかにされている¹⁾。さらに、マスメディアやローカルメディアによる環境やごみ問題につい

ての情報提供が住民の環境への関心を高めたのに対して、友人によるパーソナルメディアを通じた働きかけが人々のリサイクル活動への動機づけを高めたとの調査結果が報告されている²⁾。

その一方で、ボランティアが中心となって自主的に行われていたリサイクルが、行政主導によりリサイクルに取り組み制度に移行した地域も数多い。「容器包装に係る分別収集及び再商品化の促進等に関する法律」が1995年に制定され、全国の多くの市町村が資源ごみの分別収集制度を導入してきているためである。このため、これまでボランティアが各地域で行ってきた自主回収も1つの転機を迎えている。活動の場を失ったことによって、活動を一時休止したり全くやめてしまうのか、今後もしなやかな形で資源リサイクルに関わったり、これまでのメンバーで活動しようとしていくのか。あるいは別のごみ減量や環境保全の活動を展開するのか。これまでの活動を評価し、自分たちが活動していくことの意味を問うことが重要な課題になっている。

原稿受付 2004.2.17 原稿受理 2004.6.24

* 名古屋大学大学院環境学研究科

** 奈良女子大学生活環境学部

*** 愛知教育大学教育学部

連絡先：〒464-8601 名古屋市千種区不老町1

名古屋大学大学院環境学研究科社会環境学専攻 前田 洋枝
(文学部心理学研究室気付)

E-mail: mhiroe1205@hotmail.com

† 本研究は平成8・9・10年度科学研究費補助金（基盤研究C（2）課題番号08610117，研究代表者：広瀬幸雄）の援助を受けて行われた。

そこで、本研究では資源リサイクルボランティアがこれまでの活動の中で得てきたものをエンパワメントという概念を用いて検討する。エンパワメントとは“個人のコントロール感、あるいは影響感、自身の生活に対する決断力”を意味し⁴⁾、エンパワメントをプロセスとして捉える場合には“個人が自分自身の生活全体にわたってコントロールと支配を獲得するのみならず、自らのコミュニティへの民主的な参加にも同様にコントロールと支配を獲得する1つのプロセスである”⁵⁾とされる。本研究で対象とした資源リサイクルボランティアは、行政主導による資源リサイクル制度の導入によって、かれらの活動の必要性が低下した例であるが、これまでの活動をそのまま続けるか、新たな活動を始めるか、という選択は分野を問わず、多くのボランティアが直面する事態である。この時、ボランティアがその活動への参加というコミットメント(行動的関与)を通じて、スキルや自信を得たり(有能感)、コミュニティなどに影響を及ぼしたり(有効感)、スキル獲得や周囲への影響を及ぼしたりする上で大きな援助となる人間関係のネットワークの獲得(連帯感)といったエンパワメントを獲得したと認識しているのか、そしてそのエンパワメントにもとづき、さらなるボランティア活動を展開しようと意図しているのかというエンパワメントのプロセスを解明することは、これまでの資源リサイクル活動だけでなく、環境や廃棄物処理の基本計画策定への市民参加や環境に配慮したライフスタイルの普及の新たな活動を進めていくために重要な課題である。

1.2 ボランティア活動の規定因を検討する必要性

ビン・缶を中心としたリサイクル行動が住民に普及する上で地域のリサイクルボランティアの役割が大きくなることが明らかとなっている。それに対して、ボランティア活動への参加継続意図を規定する心理的要因は十分に解明されたとはいいがたい。活動することがボランティア自身に及ぼした影響については、援助行動の分野で阪神大震災での災害ボランティア^{6,7)}や福祉ボランティア⁸⁾を対象とした調査など研究は始まったばかりである。災害ボランティアを対象とした研究では、活動体験を通して認識変化や自己変革といったポジティブな成果を得たこと、ボランティア活動の有意義性の認識を深めて態度を変化させ、将来機会があればボランティア活動に参加したいという意欲を高めたことが報告されている^{6,7)}。ただし、災害ボランティアの場合は緊急性の高い場面での活動のため、活動の重要度は明らかで貢献の可能性が大きかったと推測される。

社会運動への参加を規定する要因を検討したこれまで

の調査研究^{9,10)}からは、個人が運動に参加する要因として、運動によって達成されると予想できる目標、運動の中で得られるメンバー自身の利益、さらに団体への帰属意識が重要であると指摘されてきた。

運動による目標達成を活動の有効性とする、環境団体への参加についての研究¹¹⁾においても、環境団体に積極的に参加しているメンバーの方が、活動の有効性を高く評価していた。このように、影響を及ぼそうとする対象に対して効果があると感じる有効感(ボランティア活動への参加にとって重要な要因であるといえる)。

また、Claryらはボランティア活動参加について6つの動機づけ(自我防衛、活動の重要性、キャリア形成、社会的貢献、自己や他者理解、自尊心高揚)に分類した上で、活動から何らかの利益を得ることと活動継続意図との関連を検討した¹²⁾。その結果、参加当初の動機と一致する利益を活動から得ている人はそうではない人よりも活動に対する満足度が高く、活動継続意図も高いことが明らかにされている。参加動機のうちキャリア形成、自己や他者理解、自尊心高揚という利益の獲得は自信やスキルの獲得である有能感とほぼ同義といえるであろう。以上の研究から、活動を通じて得られた有能感(自信やスキルの獲得など)も参加や継続の規定因と捉えることができる。

さらに、人が連帯を築く基礎として、友人・親族、組織への参加など5つをあげた上で、社会運動への参加は連帯感に依存する部分が大きく、他の集団メンバーとの信頼の絆が参加者(あるいは他のメンバー)にとって社会的誘因となることが論じられている¹³⁾。また、組合活動への参加に関する研究¹⁴⁾において、集団への連帯感が参加の主要な規定因であることが報告されている。以上の研究から、共益を実現しようとするボランティア活動への参加には、信念や利害をともにする人々との共益実現のために団結したり、問題解決のための能力・資源のやりとりを通して助け合ったりするネットワークを築いているという連帯感が参加の規定因として重要であるといえる。

これらの先行研究から有効感、有能感、連帯感が人々の自発的な活動を規定する重要な要因であるといえる。以上の検討を踏まえ、エンパワメントを“個人あるいは集団として自己や外界の問題を解決する能力やネットワークなどの資源を獲得し、問題解決の過程で周囲に影響を及ぼすこと”と定義し、本研究では本人が活動を通してこれらのエンパワメントを得たとする自己評価として測定する。

1.3 環境ボランティア活動へのコミットメントによるエンパワーメントのプロセス

ボランティア活動を通じて達成できたこと、たとえば、グループ活動が地域や行政に影響を与えること、自分自身の有能感、仲間や友人という人間関係を得たというネットワークの獲得は本研究で考えるエンパワーメントを構成する重要な要素である。コミットメントとエンパワーメントの関連についてはこれまで十分に検討されてこなかった。環境関連の活動への積極的なコミットメントを通じて、ボランティアは社会参加のエンパワーメントを以下のようにして獲得していると考えられる。

なお、運動によって行政や地域住民などに影響を及ぼし、運動の目標を達成することは共益あるいは集合的利益であり、運動の中で得られるメンバー自身が得る有能感や連帯感は個人的利益であるといえる。社会運動やボランティア活動は集合的行為であり、社会的ジレンマの構造をもっていることから、集合行為の目標達成だけでは集合行為への参加を説明できないことが環境ボランティア活動についても指摘されている¹⁵⁾。また、自分自身の変化や視野の拡大といった自己の有能感や活動に関する技能獲得、ネットワークの広がりといった活動を通して個人的に得られることと、動けば変わるといった活動の有効性の認知は活動参加を通して得られたものの分類において異なるカテゴリーに分類されるとする研究もある¹⁶⁾。そのため、以下ではエンパワーメントを個人として得られたもの（自己の有能感、連帯感としてのネットワークの獲得など）を個人的エンパワーメント、所属するボランティアの活動を通して得られたもの（行政や地域に対する有効感）を集合的エンパワーメントとする。

1.3.1 個人的エンパワーメント

ボランティア活動はそれに参加する人にとって以下のように有意義な経験と考えられる。リサイクルの自主回収は地域の活動に参加するきっかけを非常に多くの人々に与えてきた。リサイクルや環境関連の行事に参加する中で、環境や暮らしに関する知識やノウハウを身につけたり、ボランティア活動をする上で必要な情報やスキルを得るなどして自分自身が成長し、視野が広がることを通して、自分も必要な行動が取れるという自信を深めたと予想される。このようなことを通して（個人的な）有能感というエンパワーメントを得たと考えられる。

さらにボランティア活動への参加を通して、多くの友人を得て、情報交換や困った時のサポートのネットワークを得る機会も増えたと考えられる。これまで孤立していると考えてきた人々がボランティア活動を通して地域内外の人々との関わりをもつことによってボランティアグループの人々との連帯感というエンパワーメントも獲得

したと考えられる。

1.3.2 地域・行政に対する集合的エンパワーメント

環境ボランティアによる資源リサイクル活動はごみ減量やリサイクルへの住民の関心を高めるのに大きく貢献してきたし、地域の中で環境保全に関心を持つ人々が参加できる場も作り出してきた。さらに行政による資源ごみ回収の制度の導入にも貢献するところが多かったと考えられる。このため、環境ボランティアは社会的な働きかけによって地域や行政への資源リサイクルの普及としての影響を及ぼしたという有効感としてのエンパワーメントを獲得してきたと考えられる。

1.3.3 エンパワーメントと将来の活動意図

以上のようなエンパワーメントは、メンバーの将来の環境保全の行動に大きな影響を与えると考えられる。環境保全の活動に関しても、エンパワーメントが環境ボランティアの活動継続意図・関連する活動への参加意図を高めることが明らかとなっている¹⁷⁾。このため、活動によってエンパワーメントを獲得することは将来の環境ボランティア活動や近年市民参加で行われることが増えてきた環境基本計画策定への参加を促進すると考えられる。

以上より、これまで論じてきた個人的エンパワーメント（有能感や連帯感）や集合的エンパワーメント（行政や地域に対する有効感）をボランティア活動へのコミットメントを通して獲得することは今後のボランティア活動意図を高めると考えられる。

1.4 目的

本研究では、行政が資源リサイクルの回収に乗り出した地域として愛知県日進市と東郷町を選定し、それぞれの地域でリサイクル活動を行ってきた環境ボランティアを対象として、活動へのコミットメントを通じてどのようなエンパワーメントを獲得したのか、さらにそのエンパワーメントが今後の多様なボランティア活動への参加を促すのかという一連の要因連関のプロセスを検討する。

2. 方法

2.1 調査地域

愛知県日進市および東郷町を調査地域とした。

調査時点において、東郷町では既にボランティア主導による自主回収から、町の環境課主導による資源ごみの回収制度に移行しており、各地域での資源ごみ回収作業は自治会（区会）役員が主体となってステーションでのボックスの配置や整理を行っている。日進市でも調査時点でいくつかのモデル地区で行政による試験的な資源ごみの回収が開始されており、その地域のボランティアは

回収作業から手を引いている（平成 11 年度中に日進市全域で資源ごみ回収の新制度導入が完了した）。

2.2 調査対象者

日進市および東郷町において資源ごみの回収を行っている（あるいはかつて行っていた）団体のメンバーを調査対象とした。

調査票を配布した人数は 378 人（日進市 318 人，東郷町 60 人）である。

2.3 調査票の構成

2.3.1 資源リサイクル活動へのコミットメント

資源リサイクルボランティアのさまざまな活動にどれほど行動的に関与したのか，すなわち活動へのコミットメントの指標である。コミットメントとして地域の人々への 2 種類の働きかけ（ビン・缶を出すようにとの依頼，収集作業の手伝いの依頼）の程度をそれぞれ 3 段階（多くの方に依頼した，一人か二人には依頼した，依頼したことはない）で尋ねた。

2.3.2 資源リサイクルボランティア活動によるエンパワメント

資源リサイクルボランティア活動を通じてエンパワメントをどれだけ得たと評価しているか尋ねるために，個人的なエンパワメントとして有能感（視野拡大など成長感，活動に必要な知識などの獲得），連帯感（ネットワークの獲得），集合的エンパワメントとして，行政に対する有効感，地域住民に対する有効感をとりあげた。それぞれについて 2 項目ずつ，合計 8 項目を用意し，“非常にそう思う”～“全くそう思わない”の 5 段階で回答させた。

2.3.3 ボランティア活動意図

今後のボランティア活動意図について“リサイクル活動以外のボランティア活動に参加してみたい”など 3 項目について，“非常にそう思う”～“全くそう思わない”の 5 段階で回答させた。

2.3.4 属性項目

性別，年齢，居住地域などについて尋ねた。

2.4 手続き

日進市と東郷町において無償物であるスチール缶やビンだけ，あるいは古新聞やアルミ缶とともにスチール缶やビンも合わせて回収している（いた）団体という基準¹に該当した日進市 39 団体，東郷町 5 団体の計 44 団

体を対象とした。なお，リサイクルを活動の主目的としている団体（以下，リサイクル団体），その他の団体（子ども会など）とも，リサイクル活動は月に 1 回が基本であり，地域の回収ステーションまで住民が運んできた資源を分類整理し，業者への引き渡し作業を当日参加したボランティアメンバーで行っていた。また，団体は，回収された資源量の合計や次回の収集日時を知らせるための広報を発行して，地域住民に配布していた。

各団体の代表に事前に電話にてアンケート調査への協力を依頼したところ，すべての団体から承諾を得た。さらに各団体で資源ごみの回収作業に参加したメンバー数を問い合わせた。

上記の団体の資源ごみ回収作業に参加した経験を持つボランティアの全員を調査対象とする全数調査である。調査は団体ごと一括して代表者にメンバー数の調査票と封入用封筒を郵送し，代表者に団体のメンバーに配布し，封筒に封入された調査票を回収の上，一括して返送することを依頼した。

団体の代表者への依頼は 1998 年 6 月上旬に行い，調査票は中旬に郵送した。調査対象者である団体のメンバーには 7 月下旬までに代表者に回答された調査票を返すように依頼した。団体の代表者には回収された調査票の入った封筒をまとめて 7 月下旬までに返送することを依頼した。

3. 結果

3.1 回収結果

配布した 378 票のうち，郵送されてきた総数である単純回収数は 351（日進市 296，東郷町 55），本研究で検討した項目に記入漏れのなかった有効回収数は 298 であ

体を除外したのは，それらの団体がリサイクル活動をするのは活動資金集めが主たる目的と考えられたためである。子供会や PTA の場合にはリサイクル作業を分担するのは会の全員ではなく主に役員のためのため，ほとんど役員だけが対象になっている。¹¹ 調査対象の団体のうち，東郷町の団体数が少ないのは日進市よりも早い時期に町主導で無償物のビン缶の資源ごみ回収が開始されたため，東郷町の各地域で自主的にリサイクルを始めるボランティア団体が数多く現れる機会がなかったからである。逆に日進市で多くのボランティア団体が生まれたのは行政によるリサイクル制度が導入されるのが遅れたことも一因となっている。なお，資源ごみの回収を主たる目的として結成された団体の数は 27，子ども会や自治会あるいは福祉ボランティアなどリサイクル以外に主たる目的を持つ団体の数は 17 であった。リサイクル団体ではボランティアメンバーが「個人単位」で参加したという特徴があるのに対して，その他の団体では既に存在している「グループ単位」でリサイクルを開始したという特徴をもっている。

¹ 古新聞やアルミ缶など有償の資源ごみだけを回収している団体

る。有効回収率は78.8%であった。

3.2 回答者の基本属性

性別は女性が大多数を占めた(95.3%)。年齢は40代が最も多く(33.2%)、次いで50代(29.9%)と30代(25.5%)が多い。回答者の居住地域は83.9%が日進市であり、16.1%が東郷町であった。またリサイクル団体のメンバーは70.1%、その他の団体(子供会など)のメンバーは29.9%であった。

3.3 コミットメント、エンパワーメント、ボランティア活動意図

3.3.1 コミットメント

“ビン・缶を出すように依頼する”、“収集作業の手伝いを依頼する”について、それぞれ3段階(多くの方に依頼した、一人か二人には依頼した、依頼したことはない)で尋ねた。その結果、ビン・缶を出すようにとの依頼では多くの方に依頼したという回答が最も多かった(127名、42.6%)のに対して、収集作業の手伝いの依頼では依頼したことはないという回答が最も多かった(173名、48.1%)。

“依頼したことはない”1点～“多くの方に依頼した”3点として得点化し、以下の分析に使用した。

3.3.2 エンパワーメント

“リサイクル活動によって自分の視野が広がった”に

ついては145名(48.7%)の人が“ややそう思う”と回答していた。“リサイクル団体の活動が無ければ、行政による分別回収の導入はもっと遅れていた”についても148名(49.7%)が“非常にそう思う”と回答していた。“全くそう思わない”1点～“非常にそう思う”5点として得点化したところ、各項目の平均点は3.08から4.17であった。基本的に資源リサイクルボランティアは活動を通してエンパワーメントを感じているといえる。

エンパワーメントに関する項目について、変数構造の妥当性を検討するためにAmosを用いて検証的因子分析を行った。その結果、個人的エンパワーメント(有能感)、個人的エンパワーメント(連帯感)、集合的エンパワーメント(行政に対する有効感)、集合的エンパワーメント(地域住民に対する有効感)の4因子構造であることを確認した(Table 1)。適合度の各指標の値は、 $\chi^2(14)=18.87(p=.17)$, $GFI=.98$, $AGFI=.96$, $RMSEA=.03$ であり、 GFI , $AGFI$ がともに.9をこえていることから、モデル適合の基準を満たしているといえる。

3.3.3 ボランティア活動意図

“地域のイベントにもっと参加したい”については“ややそう思う”と回答した人が118名(39.6%)、“非常にそう思う”と回答した人が29名(9.7%)であり、約半数の人が参加したいと回答していた。“全くそう思わない”1点～“非常にそう思う”5点として得点化した

Table 1 Confirmatory factor analysis and means of empowerment items

Item	F1	F2	F3	F4	mean	SD
I got a broader point of view by recycling activity. (リサイクル活動によって自分の視野が広がった)	.76				3.97	0.82
I gained broader information from recycling volunteers' network. (リサイクルのネットワークを通じて環境など幅広い情報を得られた)	.76				3.57	1.03
I got social ties for support and assistance in times of trouble. (困ったことがあれば、サポートや助力を求められるつながりができた)		.91			3.35	0.99
I got trustworthy friends. (なんでも話し合える友人が得られた)		.68			3.08	1.01
Our recycling group activities led to the local autonomy's active effort for recycling. (リサイクル団体の活動が行政のリサイクルへの積極的な取り組みにつながった)			.92		4.04	0.98
Without our recycling group activities, introduction of new recycling system would have been delayed. (リサイクル団体の活動が無ければ、行政による分別回収の導入はもっと遅れていた)			.67		4.17	1.01
Recycling activities raised community residents' consciousness of recycling. (リサイクル活動によって、住民のリサイクルに対する意識が高まった)				.70	3.92	0.90
I realized that we can solve problems in our community, if we address the issues together. (皆と話しよにやれば、地域の問題も解決できると実感した)				.69	3.62	0.90
Correlations between factors						
Factor 1 (individual empowerment: efficacy)	1	.74	.35	.64		
Factor 2 (individual empowerment: solidarity)		1	.15	.54		
Factor 3 (collective empowerment: effectiveness on their administration)			1	.65		
Factor 4 (collective empowerment: effectiveness on their community)				1		

This analysis was conducted by Amos 4.0.

chi-square = 18.87, df = 14 (N = 298), p = .17, GFI = .98, AGFI = .96, RMSEA = .03

Table 2 Factor analysis and means of intention to participate in new voluntary activities

Item	F 1	Communality	Mean	SD
I want to participate in events of my community. (地域のイベントにもっと参加したい)	.84	0.71	3.46	.89
I want to participate in other voluntary activities than recycling activity. (リサイクル活動以外のボランティア活動に参加してみたい)	.78	0.62	3.36	1.06
If I am called on to participate in some activities in case of occurring some troubles in my community, I want to cooperate. (もし地域で何か問題が起こって、活動に参加するよう呼びかけられたら、協力したい)	.73	0.53	4.06	.76
Eigenvalue	1.85			
Proportion	61.7			

Initial factor extract method was principal component analysis.

ところ、各項目の平均点は3.46から4.06であった。今後も基本的に何らかの活動に参加したいと考えている人が多いとわかる。ボランティア活動意図3項目については、主成分分析を行い、1因子構造を確認した(Table 2)。その上で信頼性の検討のため、 α 係数を算出したところ、 α 係数は.68であり、その後の分析に耐え得るものと判断した。

なお、エンパワメントの各因子、ボランティア活動意図の3項目について、単純加算得点を尺度得点とし、属性変数と各尺度の関連を検討したところ、年齢、居住地域に有意な関連のあるものも見られた。年齢に関しては有能感(30代以下 $M=7.2$, 50代以上 $M=7.9$, $F(2)=4.4$, $p<0.05$)、行政に対する有効感(30代以下 $M=7.3$, 50代以上 $M=8.7$, $F(2)=17.5$, $p<0.05$)、地域に対する有効感(30代以下 $M=7.1$, 50代以上 $M=7.9$, $F(2)=7.4$, $p<0.05$)において、いずれも50代以上の方が30代以下よりも有意に得点が高いという結果が得られた。居住地域に関しては有能感(日進市 $M=7.4$, 東郷町 $M=8.1$, $F(1)=6.4$, $p<0.05$)、行政に対する有効感(日進市 $M=8.1$, 東郷町 $M=9.0$, $F(1)=11.7$, $p<0.05$)において、いずれも東郷町のボランティアの方が日進市のボランティアよりも有意に得点が高いという結果が得られた。また、リサイクル団体のメンバーとその他の団体のメンバーで各尺度得点を比較したところ、有能感(リサイクル団体 $M=7.7$, その他の団体 $M=7.1$, $F(1)=10.4$, $p<0.05$)、行政に対する有効感(リサイクル団体 $M=8.5$, その他の団体 $M=7.5$, $F(1)=23.2$, $p<0.05$)、地域に対する有効感(リサイクル団体 $M=7.7$, その他の団体 $M=7.1$, $F(1)=11.9$, $p<0.05$)において、いずれもリサイクル団体の方がその他の団体よりも有意に得点が高いという結果が得られた。

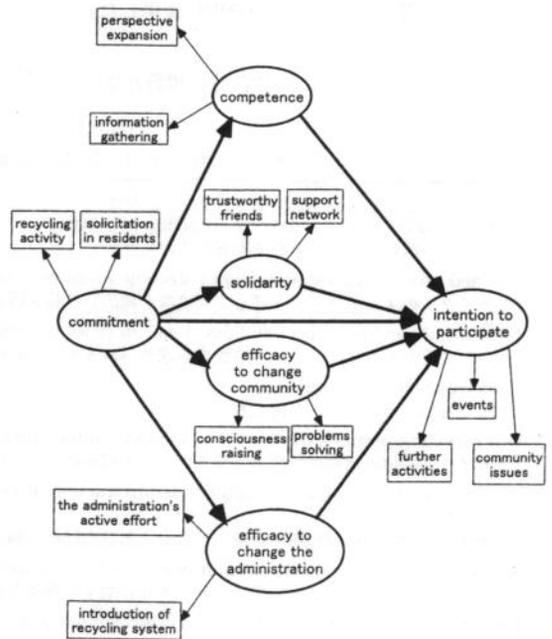
3.4 共分散構造分析によるコミットメント、エンパワメントとボランティア活動意図との関連

コミットメントが各エンパワメントに影響を及ぼし、エンパワメントがボランティア活動意図に影響する過

程を検討するために共分散構造分析を行った。

その際、コミットメントが活動意図に直接影響しており、また、エンパワメントを通して間接的にも影響するというモデルをモデル1 (Fig. 1)、コミットメントから活動意図への直接効果はなく、エンパワメントを通じた間接効果のみとするモデル2 (Fig. 2) を用意して検討を行った。

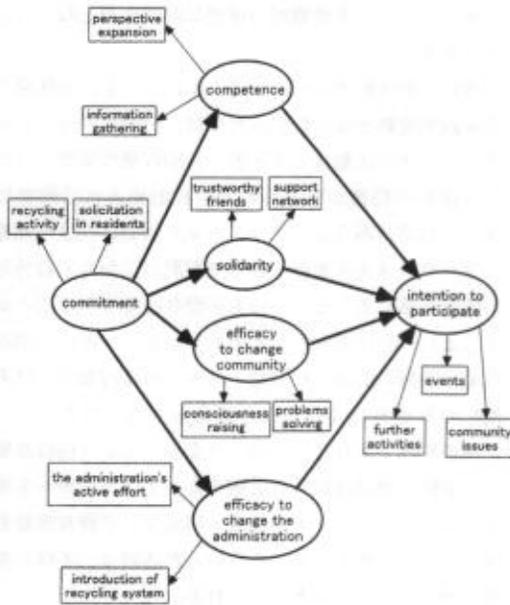
まず、コミットメントから活動意図への直接のパスを想定するモデル1に基づいて分析を行った。その結果、適合度の各指標の値は、 $\chi^2(51)=96.23$ ($p<.01$), $GFI=.95$, $AGFI=.92$, $RMSEA=.06$ であった。 GFI , $AGFI$ がともに.9をこえているが、 $RMSEA$ は.05を



(Model 1: The effect of commitment to volunteer activities on intention to participate is directly as well as mediated by acquired empowerment.)

Note: Error terms are omitted.

Fig. 1 Structural equation modeling on factors affecting intention to participate in new voluntary activities



(Model 2: The effect of commitment to volunteer activities on intention is mediated by acquired empowerment.)

Note: Error terms are omitted.

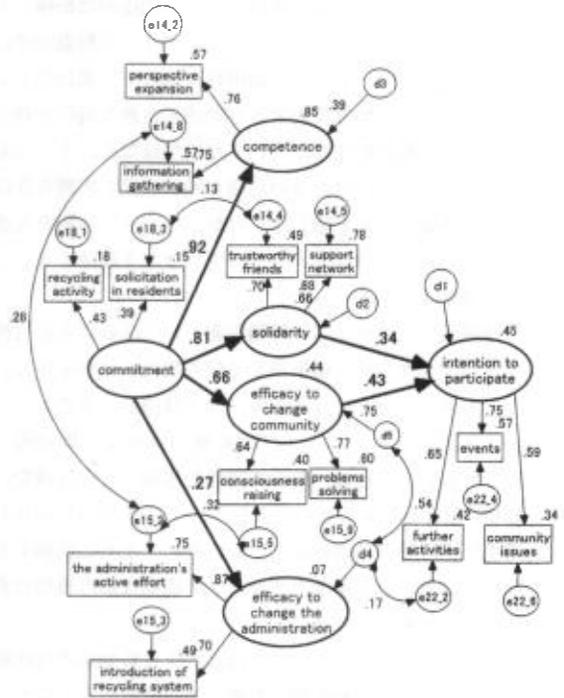
Fig. 2 Structural equation modeling on factors affecting intention to participate in new voluntary activities

上回っており、共分散構造分析におけるモデル適合の基準を十分満たしているとはいえない。また、コミットメントからボランティア活動意図への直接のパスは .05 で、有意ではなかった。

そこで、コミットメントから行動意図への直接効果を仮定するモデル1よりもエンパワーメントを通した間接効果のみとするモデル2がより適合していると考え、再分析を行った。

モデル2に基づく分析の結果¹、エンパワーメントからボランティア活動意図へのパスは集合的エンパワーメントの地域に対する有効感のみ有意であった ($p < .05$)。

¹ 片矢印は因果関係を表し、両矢印は共分散(相関)を表す。四角は観測変数、丸は潜在変数を表す。ただし、「e」は誤差変数、「d」は攪乱変数を表す。片矢印に付してある数字は標準化係数の値を示し、両矢印に付してある数値は相関の推定値である。図中の片矢印、両矢印の数値のいずれも有意である ($p < .05$) が、本研究での分析の主目的である、コミットメントが各エンパワーメントの因子に及ぼす影響、およびエンパワーメントの各因子が参加意図に及ぼす影響を示す片矢印について、太い矢印で図示している。なお、潜在変数の右肩の数字は重相関係数の平方の値を示している。



chi-square = 98.48 df = 54 (N = 298) $p < .01$ GFI = .95 AGFI = .92 RMSEA = .05 RMSEA lower limit = .04 RMSEA higher limit = .07

Fig. 3 Result of structural equation modeling on factors affecting intention to participate in new voluntary activities

なお、個人的エンパワーメントの連帯感が有意傾向であった ($p < .10$)。エンパワーメントからボランティア活動意図へのパスについて有意ではなかったものを順番に削除してゆくと、最終的に個人的エンパワーメントの連帯感と集合的エンパワーメントの地域に対する有効感がボランティア活動意図に対する有意なパスとして残った (Fig. 3)。このことから、コミットメントは個人的エンパワーメントと集合的エンパワーメントともに影響を与えるものの、ボランティア活動意図には直接影響しないこと、個人的エンパワーメントの連帯感、および集合的エンパワーメントの地域に対する有効感を通して影響することが明らかとなった。この結果を最終的なモデルとした。適合度の各指標の値は $\chi^2(54) = 98.48$ ($p < .01$)、GFI = .95、AGFI = .92、RMSEA = .05 であり、RMSEA の値に改善が見られた。

4. 考 察

4.1 コミットメントとエンパワーメントと行動意図との関連

コミットメントは直接活動意図に影響しているのでは

なく、エンパワーメントを媒介として間接的に影響していることが明らかとなった。ボランティア活動意図では個人的エンパワーメントの連帯感に加えて、集合的エンパワーメントの地域に対する有効感も有意な説明変数であった。活動に参加したというだけでなく、そこから友人を得たり、自分たちの活動が地域住民に影響を及ぼしたと活動の効果を感じることで、さらなる活動を促進するというエンパワーメントのプロセスを確認することができたといえる。

地域住民のリサイクル行動定着という活動による目標達成だけでなく、活動を通して個人的にかけがえのない友人を得られたというネットワーク獲得としてのエンパワーメントもボランティア活動意図の重要な規定因であったということは、その重要性を指摘した先行研究の知見^{10,13)}と一致するものである。一人一人ではなかなか環境配慮行動の効果が見えにくいと、ともに活動する仲間を得ることは環境ボランティア活動促進の重要な要因であると考えられる。

なお、本研究において、行政に対する有効感と有能感とはボランティア活動意図の有意な説明変数とならなかった。集合的エンパワーメントの行政に対する有効感と地域に対する有効感の尺度得点における相関は.45、個人的エンパワーメントの有能感と連帯感の尺度得点における相関は.56 (いずれも $p < .001$) と有意な相関を示している。そのため、解析において、個人的エンパワーメント、集合的エンパワーメントともにそれぞれ一方しか有意な説明変数とならなかった可能性はあるが、今回研究対象とした資源リサイクルボランティアの活動の特徴からは、以下のように考えられる。

まず、行政に対する有効感がボランティア活動意図に有意な影響を及ぼさなかったのは、リサイクル活動が地域でのビン・缶の収集活動であり、自主的な収集システムを立ち上げるのが活動の主目的であったということが指摘できる。結果的には日進市・東郷町ともに、行政によるビン・缶の収集が開始された。しかし、資源リサイクルボランティアの活動そのものは、行政に資源リサイクルの制度化を働きかけるといよりは地域住民にビン・缶を可燃ごみ・不燃ごみではなく、資源として分別する行動を定着させ、分別されたビン・缶の収集・資源化を行う地域での自主的システム作りを目指していた。リサイクル団体のリーダーはビン・缶の収集・資源化システムを立ち上げる過程で行政に支援を求めたり、将来的には制度化を要求していたことはありうる。しかし、リサイクルボランティアにとって、自分たちの活動の成果として最もわかりやすいのは地域で収集したビン・缶の量であり、隣近所の住民に分別や収集作業への協力を

直接依頼した時の反応である。このため、本研究では集合的エンパワーメントのうち、地域に対する有効感の方がボランティア活動意図の重要な説明変数となったと考えられる。

次に、個人的エンパワーメントについて、有能感が有意な説明変数とならなかったのは、一般のリサイクルボランティアの活動はビン・缶の分別収集作業であったという活動の特徴が考えられる。有能感とは活動参加によって日常の暮らしやボランティア活動に役立つ知識やノウハウ、スキルを得ることで視野の広がりや自分自身の成長を感じることで、自分も必要な行動をとることができるという自信をもつことである。ビン・缶の分別収集作業と視野の広がりや知識・スキルの獲得などとは直接的につながりにくかったと考えられる。ただし、リーダーの場合であれば、行政との交渉、ビン・缶収集業者との連絡、地域住民への広報やよりよいシステムを検討するためのアンケートの作成・実施など多様な活動を展開していると考えられ、こういった活動は、多様な有能感につながっていると考えられる。

4.2 今後の展望

本研究では、リサイクル活動へのコミットメントが個人的エンパワーメント、集合的エンパワーメントを通してボランティア活動意図を高めるプロセスを確認することができた。今後の課題として、ボランティア活動のリーダーと一般のボランティアの活動によるエンパワーメントのプロセスの詳細な検討、活動へのコミットメントに対する周囲からのフィードバックがエンパワーメントプロセスに与える影響の検討、ボランティアのエンパワーメントとバーンアウト（消耗感、消極的な見方、個人的達成感の後退といった症状が特徴としてあげられる¹⁰⁾）の関係についての検討、近年の新たな形の市民参加とボランティアのエンパワーメントとの関連の検討などの必要性があげられる。

本研究において個人的エンパワーメントのうち、有能感についてはボランティア活動意図の有意な説明変数とならなかったことについて、資源リサイクルの一般ボランティアが従事した活動の特徴から考察した。その上で、資源リサイクルボランティアについても、リーダーについては多様な活動を通じて有能感を獲得している可能性も考えられるとした。活動を展開するためにボランティア活動のリーダーに要求される行動を通して、有能感が獲得され、さらなる活動意図に至るプロセスを実際に検討することは、ボランティアの活動促進援助に役立つと考えられる。

2番目の活動へのコミットメントに対する周囲からの

フィードバックの影響に関して、本研究では、ピン・缶の分別への協力依頼、収集作業の協力依頼という2つの行動的関与をコミットメントの指標とした。それぞれの協力依頼をどのくらいの人に働きかけたかということを経験紙で尋ねているが、質問紙ではどのくらいの人から協力が得られたかということも尋ねていた。自身が分別や収集作業の協力依頼をした程度（本研究でのコミットメントの指標）については質問紙回答者のうち、無回答はさほど多くなかったが、分別や収集作業への協力依頼に対して協力してくれた人の割合についての質問項目では約3分の1が無回答であった。共分散構造分析では基本的に分析対象の変数に欠損値のないサンプルをデータとして用いることが要求されるため、依頼に対して協力した人の割合は本研究での分析対象に含めなかったという経緯がある。活動へのコミットメントに対する周囲からのフィードバックについても適切な指標を用いて分析をすることは、エンパワーメントからボランティア活動意図へのプロセスのよりよい理解に役立つと考えられる。

また、本研究ではボランティア活動へのコミットメントがエンパワーメントに影響を及ぼし、エンパワーメントを媒介変数として今後の活動への参加意図に及ぼす影響を検討したが、今後の活動意図（あるいは実際のその後の活動へのコミットメントの程度）がエンパワーメントに影響することも考えられる。本研究では、過去のコミットメントの程度と現在のエンパワーメントから将来の参加意図への影響を検討したが、これまでの活動によるエンパワーメントが現在の活動（コミットメント）のレベルにどのように影響しているか、というエンパワーメントプロセスの別の一部分を検討することが、エンパワーメントプロセスの理解を深める上での今後の検討課題である。

このような活動へのコミットメントを通してエンパワーメントを獲得し、それがさらにその後の活動を促進するというエンパワーメントプロセスがある一方で、さまざまな理由でボランティア活動を休止、中止する人々がいる。本研究で対象とした資源リサイクルボランティアは行政による分別収集制度開始という活動の必要性が低下した事例であり、調査時点で資源収集活動を行っていない人も1割程度いた。活動していない人とそうではない人の中でボランティア活動意図の尺度得点の平均に有意な差は見られなかった。しかし、ボランティア活動をしている人の中には活動対象への働きかけに対する無力感やボランティア団体内での人間関係、活動の負担などを理由として活動から離れる人があることも事実である。そのため、ボランティア活動によるエンパワーメントというポジティブなプロセスだけでなく、バーンアウト

というネガティブなプロセスもあわせて検討することはボランティア活動支援において重要と考えられる。

最後に、本研究で検討したボランティア活動意図は特に活動内容を限定しない形で尋ねたが、近年増加している市民参加の事例は環境やごみ問題に取り組み、地域や行政に影響を及ぼすことができる新しい場といえる。特に、環境の分野では自治体の環境基本計画の策定を市民参加で行う取り組みがなされている。これまで活動してきたボランティアがこのような市民参加の場に関わるのかどうかの意思決定、そして、関わる場合にこれまでの活動経験が活かされるのか、あるいはボランティア活動未経験者を市民参加の場にいかによれば促せるか、ということにエンパワーメント研究は大いに役立つであろう。そして、環境基本計画などの策定における市民参加をエンパワーメントの視点から検討することはボランティア活動を理解したり、よりよい廃棄物行政を検討する上で重要と考えられる。

[謝 辞]

本研究の調査に回答くださった愛知県日進市と東郷町の資源リサイクルボランティアの皆様へ深く感謝いたします。

また、本論文を執筆するにあたり、北海道大学大学院文学研究科の大沼進助教授に多くの有益な助言をいただきました。記して感謝いたします。

参 考 文 献

- 1) 広瀬幸雄：環境と消費の社会心理学——公益と私益のジレンマ——、名古屋大学出版会、pp. 183-210 (1995)
- 2) 野波 寛、杉浦淳吉、大沼 進、山川 肇、広瀬幸雄：資源リサイクル行動の意志決定における多様なメディアの役割——パス解析モデルを用いた検討——、心理学研究、第68巻、第4号、pp. 264-271 (1997)
- 3) 杉浦淳吉、大沼 進、野波 寛、広瀬幸雄：環境ボランティアの活動が地域住民のリサイクルに関する認知・行動に及ぼす効果、社会心理学研究、第13巻、第2号、pp. 143-151 (1998)
- 4) J. Rappaport: In praise of paradox: A social policy of empowerment over prevention, *American Journal of Community Psychology*, Vol. 9, No. 1, pp. 1-25 (1981)
- 5) M. A. Zimmerman and J. Rappaport: Citizen participation, perceived control, and empowerment, *American Journal of Community Psychology*, Vol. 16, pp. 725-750 (1988)
- 6) 高木 修、玉木和歌子：阪神・淡路大震災におけるボランティア——避難所で活躍したボランティアの特徴——、関西大学社会学部紀要、第27巻、第2号、pp. 29-60 (1995)

- 7) 高木 修, 玉木和歌子: 阪神・淡路大震災におけるボランティア——災害ボランティアの活動とその経験の影響——, 関西大学社会学部紀要, 第28巻, 第1号, pp. 1-62 (1996)
- 8) 妹尾香織, 高木 修: 援助行動経験が援助者自身に与える効果: 地域で活動するボランティアに見られる援助成果, 社会心理学研究, 第18巻, 第2号, pp. 106-118 (2003)
- 9) C. Kelly and S. Breinlinger: The Social Psychology of Collective Action: Identity, injustice and gender, Taylor & Francis (1996)
- 10) B. Klandermans: The social psychology of protest, Blackwell (1997)
- 11) L. C. Manzo and N. D. Weinstein: Behavioral commitment to environmental protection. A study of active and nonactive members of the Sierra Club, Environment & Behavior, Vol. 19, No. 6, pp. 673-694 (1987)
- 12) E. G. Clary, M. Snyder, R. D. Ridge, J. Copeland, A. A. Stukas, J. Haugen and P. Miene: Understanding and assessing the motivations of volunteers: A functional approach, Journal of Personality and Social Psychology, Vol. 74, No. 6, pp. 1516-1530 (1998)
- 13) B. Fireman and W. A. Gamson: Utilitarian logic in the resource mobilization perspective: In M. N. Zald and J. D. McCarthy (Ed.), The Dynamics of Social Movements, Winthrop, pp. 8-44 (1979)
- 14) C. Kelly and J. E. Kelly: Who gets involved in collective action? Social psychological determinants of individual participation in trade unions, Human Relations, Vol. 47, No. 1, pp. 63-88 (1994)
- 15) 安藤香織, 広瀬幸雄: 環境ボランティア団体における活動継続意図・積極的活動意図の規定因, 社会心理学研究, 第15巻, 第2号, pp. 90-99 (1999)
- 16) 安藤香織: 環境ボランティアは自己犠牲的か: 活動参加への動機づけ, 質的心理学研究, 第1号, pp. 129-142 (2002)
- 17) 前田洋枝, 広瀬幸雄, 杉浦淳吉: エンパワーメントがビーチクリーンアップ参加者の活動継続意図に及ぼす影響, 日本社会心理学会第44回大会発表論文集, pp. 418-419 (2003)
- 18) 田尾雅夫, 久保真人: パンアウトと理論の実際 心理学的アプローチ, 誠信書房 (1996)

Environmental Volunteers' Recycling Activities and Empowerment — Competence, Solidarity, and Collective Efficacy Enhances Volunteers' Intentions to Participate in Further Activities —

Hiroe Maeda*, Yukio Hirose*, Kaori Ando**
Junkichi Sugiura*** and Kayo Yoriuji*

* Graduate School of Environmental Studies, Nagoya University

** Faculty of Human Life and Environment, Nara Women's University

*** Department of Education, Aichi University of Education

* Correspondence should be addressed to Hiroe Maeda:
Graduate School of Environmental Studies, Nagoya University
(1 Furo-cho, Chigusa-ku, Nagoya City, Aichi, 464-8601 Japan)

Abstract

The present study explored the effects of commitment to volunteer environmental activities on empowerment and intention to participate in further volunteer activities. A survey of 378 volunteer members was conducted in two cities in which the municipal administrations had introduced a new recycling system. Main results of the survey were the following. The commitment enhanced both individual empowerment and collective empowerment. The effect of commitment to volunteer activities on intention was mediated by the acquired empowerment. Collective empowerment (efficacy to community change) and individual empowerment (solidarity) were the main determinants of their intention to participate in further voluntary activities.

Key words: environmental volunteer, commitment, individual empowerment, collective empowerment